

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月11日(木)

《信じる人が幸せ》

ある奥さんがいました。彼女には最近心配事ができました。友達が夫の浮気が原因で離婚をしたため、結婚してから一度もそんなことはなかったのに、自分の夫を疑い始めたのです。誰が見ても自分の夫がとても素敵で誘惑される可能性があると思いこんでしまったのです。そして何日間も夫の行動を疑いの目で見守りました。

ある夜、同じ部屋で寝ていると、夜中に夫の携帯電話が鳴りました。夫は眠そうな声で電話に出ます。携帯電話からは、若い女性の声が聞こえてきます。そこで奥さんは、夫がどのような返事をするか耳をそばだてました。夫は、「はい、分かりました。」とだけ言うと、電話を切りました。そして少し考え込んでから起き上がり、服を着かえて外に出ました。奥さんは「やった。夫は間違いなく浮気をしている。だから証拠をつかまなければならない。」と思いながら夫が戻ってくるのを待ちました。数分後に夫は戻ってきました。彼女は、夫が戻った途端に大きな声で「あなた、誰と浮気をしているのか正直に言いなさい。携帯電話から聞こえた若い女性の声は、誰ですか。」と詰め寄りました。けれども、夫は戸惑う表情を浮かべて、すぐには答えません。奥さんは、「この人は、隠しているからはっきり答えられないのだ。」と疑いに確信を持ちます。

すると夫は「何のことを言っているのか私には分からない。」と答えました。奥さんは、「先ほどの電話であなたは現行犯として私に捕まったのです。夜中に若い女性からかかってくる電話、聞かれないように静かに返事をする態度、そしてすぐに出て行く様子、全て浮気の証拠としてぴったり合います。正直に白状しなさい。」と言いました。すると夫は「あれは隣に住んでいる女子大生からの電話だ。」と答えました。奥さんは「その学生がなぜあなたに電話をかけてくるのですか？」と聞きました。夫は「私が自分の車を彼女の車の後ろに止めたので、彼女は出かけられないから移動してほしい、と言ってきたのだ。起きて移動させるのも面倒なのでどうしようかと迷ったが、結局移動させてきたよ。彼女はもう出かけところだ。」と答えました。

これは実際にあり得る話です。疑おうとすれば何でも疑ってしまうのが人間の心の働きだと思います。たぶん、皆様もいろいろなことをご主人を疑ったことがあるでしょう。逆にご主人も奥さんのことを疑ったことがあるでしょう。その時、どういう気持ちでしたか。結局疑う者が負けるのです。つらいのも疑う者のほうです。

私たちは、人生の中でいろいろなことを疑います。私はよく疑うタイプだ、と思う人もいます。またある意味では、“疑う者が知恵のある者だ”とも言われています。すぐ信じてしまうと馬鹿にされてしまう世の中で、私たちは生きているのです。しかしいくら知恵ある者でも、家族の中、友達の中でさえ疑ってしまったら、疑うほうが馬鹿です。疑うほうがいつもつらい気持ちになります。た

例えば、私が信者の笑顔を疑い始めたら、私はやっていけません。「この人はいつも笑顔で私に話しかけるが、その本音は何だろう。」と思い始めたら、司祭ではなくて精神病者になってしまいます。笑顔をそのまま信じてみるのが、自分を幸せにします。

皆様、今日の福音(ルカ 11・14 23)では、イエス様を疑った人の話が紹介されていました。どの集団、どの集まりに行っても、その中には疑うばかりの人がいます。逆に、何でも信じる人もいます。皆様はどちらを選びますか？どちらを選ぶかの基準は簡単です。どちらが幸せになるか、です。疑う者は、結局全てのを失います。信仰も同じことだと思います。私たちが子どものように信じ始めたこの信仰、この信仰が私を幸せにしてくれるという思いを拒む必要はありません。その純粋な心によって、まことのイエス様のみ言葉が理解できるのではないかと思います。

歴史を振り返ってみても、疑いばかりの人より、馬鹿にされても信じる人のほうが幸せになっています。そして、信じてくれる人に対しては、背くのも難しくなります。相手に疑いがある時の正しい態度は、その人を信じてあげることです。信じてあげれば、もし相手に背こうとする心があっても、迷いが生じるでしょう。そしてもし信じてだまされても、だまされた人は結果としては幸せだと、私は思います。

ありがとうございました。